

第四編

《教育座談会》

「学力向上のための地域を挙げた取り組みを！！」

近年「ゆとり教育」の本質が現場に浸透しないまま、その弊害が指摘されるようになってきた。2001年頃より社会的論議の的となった「学力低下問題」が、その最たるものである。「ゆとり教育」は、その目的が達せられたか検証ができない状態の中、それを原因として生徒の学力が低下していると指摘され、批判されるようになってきた。それを受けて、2002年には遠山文科相より、『確かな学力向上のための2002アピール「学びのすすめ」』が出された。ここでは、「生きる力」をバランスよく育てていくことが提言されている。これからは、今日の変化の激しい社会をたくましく生き抜くため、「確かな学力」を身に付けることが求められている。

これらを踏まえ、新学習指導要領が2003年より小学校では実施されている。新学習指導要領では、「生きる力」を育む理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。改訂の具体的内容としては、指導内容の増加と授業時間の増加が挙げられている。新聞でも周知の通りPISA2003、TIMSS2003の国際調査から、日本の子ども達の学力低下が指摘されている。また2007年より全国学力状況調査が実施されている。都道府県別の順位が公表されていることから明らかなように、行政と学校現場にとって子ども達の学力を向上させることは喫緊の課題となっている。

では、実際の学校現場ではどうか。教師からは「子ども達があまり勉強しなくなってきた」という声をよく聞く。また安房地方の高校入試では、合格点が下がってきたとの情報もある。生徒数の減少が原因の一つとして挙げられているが、生徒は余り勉強しなくても高校に合格できるというのが現状である。このままでは子ども達の学力は低下していくばかりだと懸念される。安房地方の学校全てにおいて、子ども達の学力向上について取り組んでいく必要がある。学校だけではなく、家庭・地域社会の連携も必要である。このような現状を受けて、安房地方では既に対策が行われている。鴨川市では小中学生の通学合宿やゲストティーチャーの派遣、南房総市では土曜スクールや夏季講習の実施、館山市と鋸南町では教務主任会を中心として、小中が連携した学力向上の取り組みを行っている。

昨年度、この教育研究所の座談会では「安房の子ども達の学力向上を考える」とのテーマでシンポジウムを行った。そこでは小中高教員と学習塾職員、保護者にパネラーとして意見を述べて頂いた。そこでは子ども達の実態として、学習意欲の低下、知的好奇心の低下、また思考し表現する力の不足等が挙げられた。またその対策として、知的好奇心をゆさぶる体験活動の充実、授業で基本的学習習慣作りを行う、問題解決的な学習の充実、小中高が連携した取り組み等が必要であると提起された。これらは今後、安房地域全体で取り組む必要がある。また当研究所としても安房地域全体を視野に入れるべきとの指摘もあった。

以上のことを踏まえ、本年度は「学力向上のための、地域を挙げた取り組みを」をテーマとして設定した。昨年を提案を一層深め、具体的な手立てが提言できるようにしたい。そのため本年度は教育員会、小学校、中学校、高等学校、保護者の皆様と5名の方をお招きした。この座談会が、安房の子ども達の学力向上に向け、学校・家庭・地域社会がどのように連携していけばよいか考える場となることはもとより、安房教育の一層の発展に寄与できることを願う。

パネリスト	庄司 義広 様	(南房総市教育委員会 指導主事)
	佐川 仁 様	(鴨川市立太海小学校 校長)
	渡部 昭彦 様	(館山市立房南中学校 教諭)
	谷 裕之 様	(千葉県立安房高等学校 教諭)
	宮越比呂子 様	(鴨川市立東条小学校 保護者)
司 会	井藤機句男	調査研究部主事
	森田 典子	教育研修部主事

教育座談会記録

速水所長：皆さんこんにちは。本年は5名のパネリストに集まって頂きました。教育委員会、小中高校、そして保護者の方々です。今回は学力向上についてご意見を頂きたく企画しました。現在安房の教育学力向上が喫緊の課題として取り上げられています。ここにおいで下さいました方々、各現場で教育実践をされながら、また課題を抱えながら取り組んでおられる方々ですので、私達の教育実践に大きな示唆を与えてくださると考えております。私達もご意見を聞きながら、意見交換をしながら、明日の安房教育を高めるために、自分自身が何をすべきか考える機会になればと思います。パネリスト皆様には、ご意見を聴かせて頂きながら、安房教育に生かすということを思っておりますので、忌憚のないご意見を頂けたら有り難いと考えております。それでは実り多いものになることを祈念しましてご挨拶とさせていただきます。

小熊：続きましてパネリストの皆様、司会者の紹介をさせていただきます。

南房総市教育委員会指導主事 庄司 義弘 様
鴨川市立太海小学校校長 佐川 仁 様
鴨川市立東条小学校保護者 宮越 比呂子 様
館山市立房南中学校教諭 渡部 昭彦 様
千葉県立安房高等学校教諭 谷 裕之 様

以上5名のパネリストの皆様をお迎えしての座談会となります。本日の司会は、教育研修部主事の森田典子と調査研究部主事の井藤機句男、以上2名で会を進行させていただきます。

井藤：それではまず安房地域の子どもの学力の現状と課題について5人のパネリストの方々にそれぞれの立場からご意見を述べて頂きたいと思っております。では初めに庄司先生からお願いします。

庄司：南房総市教育委員会の庄司です。安房地域



の子どもの学力の現状と課題ということですが、学力という非常に幅の広い捉え方があります。私の立場からは目に見える学力に的を絞って意見を述べさせていただきます。学力差と言った

ときに児童・生徒間の個人差をよく耳にすると、その個人差をどう克服するかと言ったとき、できる子はさらにできるように、そうでない子は欠点を補い、個人差を埋めていくようにし

ていくが、実はもう一つ、「学校差」が存在します。要するに学校間同士の差です。先日行われました全国学力学習状況調査の結果も出ています。年度初めには校長会にて結果を示そうと思っています。市内には小学校13校、中学校7校あります。その小学校13校では、どの程度差があると思いますか。中学校の場合、3年のテスト等で意識はあると思います。では、お聞きしてよろしいですか。一番上の学校と一番下の学校が10点以内に収まっていない。(挙手)では、10点から20点以内。

(挙手)30点から50点。(挙手)50点以上。(挙手)50点以上はいませんね。正解者はいません。はっきり言います。85点です。これを聞いたときに、「えっ」と言いましたね。そこなのです。もし、これを知っていれば、普通の教員だったらまずいと思い、何か手を打ちますよね。ところが今、この現状を知らない状態なのです。今までは、例えば全国の平均点とその学校の平均点、あるいは生徒の差、ばらつきしか示されていないのですが、ある程度の相対的な差というのは示さなければならぬと思います。今、南房総市の話をしたが他の市でも同じことが言えると思います。似たようなことが表れています。今言いましたのは、国語のA・B、算数のA・B、この4つを足したもので言っています。B問題は問題数が少ないので、大きな差が出ることがありますが、それにしてもこの差は大きいです。それから追跡調査も行っています。平成23年度の中学3年生が、小学生の平成20年度の時と比較をしています。3年後、その中学校区の中で上位だったものが、そのまま上位に行っているか、あるいは落ちている。下の方の学校は、そのまま下の方か、あるいは上のほうに行っているのか。結果を見たときに先生方は驚かれると思います。それだけ先生方は責任を感じなければいけない。相対的に上位の子が集まったところが、中学校へ行き下がってしまった。これは中学校の責任ですよね。言葉が悪いですが、相対的に下位の学校の子ども達が集まった学校、中学校の教員がそれを知っていれば対応ができる。言いたいのは、ある程度学校差というのはあると思うのですが、一番いけないのはそれを知らないという状態。「公表すること」については何とも言えないが、少なくとも教師の間、学校の間では、指導に生かす訳ですから、絶対的な数字と相対的な位置を示すべきだと個人的に思っています。またそう動こうと思っています。

井藤：初めから数字を使って驚かされてしまいました。では佐川先生、よろしくお願いします。

佐川：太海小学校の佐川です。この問題は古くて



新しい、つまり学力向上は教員の仕事そのものです。だから学力低下は非常に重大なものとして受け止めなければなりません。先ほどの学校差は、立場上非常に

敏感に感じています。ですので、今の話は非常に大きいものとして受け止めました。先ほどの話の中に、見える学力という話がありました。学力の論議をしながら、また、地域と連携していくためにはどうするかということがあります。学校職員の中だけでの学力における共通理解・共通認識ではなくて、講師を迎え入れて、地域と保護者の皆様と学力とはどのようなものを整理しておく必要があると思います。昭和30年当時、経験主義から知識が備わっていなければ学力はついていけないという時代になりました。そしてその反動で、人間性回復、豊かな人間性の育成に移っていききました。しかしそんな中でも、できている子とできない子というのが表れました。落ちこぼれという言葉も生まれましたが、解消されずに経過しました。そして今は個性重視、要するにできない事も個性のように、人格のように考えられる時代もあります。その意味で、学校の教員にとっては、例えば、ここまで100%教えないといけないものが70%ぐらいで押さえてしまった時代がありました。そして今、新しい指導要領になり、内容が増えたと同時に時間も増えました。私が若い時代は、土曜日は休みではありません。なおかつ学習内容も多くありました。また色々な大会などもありました。しかし、そういった忙しい中でも、学力を付けたい。子どもも今と違って非常に多く40人近くいました。その中で計算問題を100%できるようにするという先生方がたくさんいました。今は新しい先生にとっては、急に内容と時数が増えたので、戸惑いがあるのではと思います。学力の話に戻りますが、読み書き計算という時代から、豊かな人間性といったものを含めて確かな学力・生きる力という、学力として身につけたもので自分の目の前にある問題をどう解決するかということを学校現場として、それをどう大きくしていくかをまず確認したいと思っています。まず現状ですが、見える学力とありましたが、私の学校や近隣の学校は少人数化が進んでおり、それほど目立

った変化はありません。しかし、例えばできる子、できない子がいますが、家庭環境に恵まれている、恵まれていないということがある。そして、保護者の都合で、学校を休んでしまい、学習の時間が取れないこともあります。また、ゲーム漬けや、スポーツクラブで土日が無い状態のこともあります。これから学校は、さらに家庭、保護者と連携していく必要があります。

井藤：ありがとうございました。では、保護者の立場で宮越さん、よろしくお願いします。

宮越：宮越です。現在、子どもが東条小学校で3人お世話になっています。鴨川市には、亀田病院や自衛隊の官舎があるので外部から転入の多い場所です。そのため、学習の面で言うと、学力向上について私達保護者が求めているものは、



点数を上げて欲しい、勉強ができるようになって欲しいという事です。その点で今住んでいる地域には、教育熱心な保護者が住んでいると思います。主人が今、亀田病院勤務のため、また引越しをする可能性があるため、全国的に展開している模試を子ども達に受けさせたことがあります。大手の私立中学校の受験を狙っている学習塾の模試においては驚くほどの結果が出ましたが、他の模試ではこのぐらいと感ずることができました。そのように全国的な状況を見て、今東条小で教えて頂いていることに満足しています。ですがこれから先、中学校・高校に進学していくにあたり保護者からすると、大学受験を意識してしまい、もう少し選択肢を与えて頂きたいという思いがあります。大学受験をする段階で、もう少し選べるレベルまで持って行って頂きたいと考えています。色々聞いていると、やはり保護者にも責任があり、努力しなければならぬ部分もありますが、つつい学校にお願いしてしまいます。それについては、私達も考えていかなければなりません。保護者の立場からは、安心して子どもを学校に入れさせて、勉強させて頂きたいという思いがあります。鴨川市には亀田病院があり、お医者さんの子どもが多いです。お医者さんご自身が学習塾に通って中学受験をし、受験戦争を勝ち抜いて来られた方なので教育熱心な親御さんが多いです。だからこのような親は都内や横浜といった都心部に流れてしまう現状があります。私が鴨川に来てから7年、その間に何人もの方がそれを理由に引越をしました。

そして、現状としてできない子をフォローしてくれていることはすごく感じています。できる子よりもできない子、できない子をできる子に追いつくように努力してくれていると感じています。しかし、同様にできる子をもっと伸ばして頂きたいという希望もあります。今日、この座談会に参加させて頂いて、保護者代表として色々と言わせて頂きたいと思っています。

井藤：保護者の立場としてできない子のフォローと共にできる子をより伸ばして欲しいというお話もあり、学校現場とは違った意見も出てきました。続きまして渡部先生、よろしくお願ひします。

渡部：房南中の渡部です。安房地区の子ども達の



学力の現状と課題ですが、4月から館山市では教務主任会で学力向上の取り組みが始まっています。私は、房南中は1年目なのですが、かつて行ったテスト、

学力状況調査、それから校内に残っているデータ、全てに目を通しました。本校は小規模校なのですが、面白い結果が出ています。A問題B問題がありますが、その活用の問題、B問題ができた年があるのです。A問題よりB問題の平均点が上回った年がありました。その要因を探って、勤務した先生方に聞くと、よくわからないという答えが返ってきました。さらに調べまして、小規模校において県の学力状況調査の平均点と比較すると、年度によってばらつきがありました。いかんせん17人、20人しか受けないという状態ですと、点数に非常にばらつきがあります。さらに分析しまして、小学校にも目を向け関連性を持って調査しているところです。全市を挙げて教務主任会で取り組んでいるところです。その調査を進めて見えてきたことは、学区ごとに課題が違うということです。例えば、保護者の就業や食事の形態が違ったり、食事の個別化、勝手化、要するに好きなものだけ食べたりするなどがあります。そこまで追い詰めると、これは家庭も巻きこんだ活動をしないと学力は高まらないと考えました。全市を挙げて課題と現状を調べた結果、概ね言えたのは、小規模校はA問題、習得は良好であると出ています。しかし大規模校ではその点が少し落ちていることが見えました。それから、学年が進むにつれて学習意欲が低下する傾向も見えています。その基礎が定着しない児童は、学習意欲が低い、学習習慣が定着していない傾向が小学校

から見えてきました。中学校では、小規模校では知識・技能は概ね良好であると出ていますが活用力が問題となっています。それは授業において工夫・改善しなければいけない。そういった方向になっています。そこで問題なのが進路への危機感が非常に薄いことです。中学3年生の意識の中に「なんとかなる」という考えが多少はあると思います。そこを何とかしようと、データ集めとその分析をしています。そして学区という括りだけではなく、個を上げるにはどうしたら良いかという考えを持ち、小中が連携をして、まずは生活習慣・学習習慣・学習の規律を確立することが大切だと考えています。そして、小学校ができること、中学校ができることを考えて、各教科に下ろしていく算段をしているところです。月に1度、各中学校区で集まって分析を進めています。学区によっては、習得に力を入れる所、活用に力を入れる所、それから教科に絞って、数学や国語と、それぞれで手立が変わってきます。私は理科と数学を持っています。理科では教科書に載っている実験を行うのですが、プラスαのものは時数の関係でなかなかできなかった。しかし今回時数が増えました。そこで様々な実験に取り組みせることで活用力を育てることも期待できます。教員が変わらないと、子どもも変わらない、学校が変われば地域も変わるのでと考えています。それぞれが連携して、一緒になって教育をしていかなければならないと感じています。そのために自分ができていることをやっていかなければならないと思っています。

井藤：小中で課題を揃えることや授業においても工夫が必要なのではないか、教員が変わらないと子どもも変わらない、学校が変わらないと地域も変わらないというお話がありました。それでは、最後に谷先生、よろしくお願ひします。

谷：安房高校の谷と申します。先ほどもありまし



たが、学力と申しまして、非常に多種多様です。ただ、一定の尺度がないと話ができませんので、知識力、テストでの得点力と言った、いわゆる目に見える学力について話をします。こ

こでは現在の安房高生の学力及び学習状況について話します。私は今年で安房高13年目になります。長い間いますと、10年前の安房高生と現在の安房高生の違いが見えてきます。皆さんもお分りのとおり、学力で比較するならば明らかに低下

していると言えます。それはこの地域独特の原因があります。若年層人口の減少により高校の統合が行われました。それにより、安房高に来る生徒は、全公立高のクラス数から考えますと、現在安房地域の中学生の3分の1が安房高に来られるという現状です。それこそ10年前は安房地区の5人か6人に一人しか来られませんでした。学検で考えますと現在は、400点以上の生徒から200点を割る生徒まで、幅広い学力層の生徒がいる学校になったと言えます。地域社会の変化による学力の変化ですので、止むを得ない部分がありますが、本日お話ししたいのは、現在の安房高生の学習への取り組みが原因である学力低下についてです。配布しました資料からは、近年入学してくる生徒の家庭学習時間が非常に減少していることが分かります。この10月に実際に安房高生にアンケートを取り、塾で学習する時間を含めた家庭学習時間です。これを見るといかに勉強をしていないかが見えます。特に2年生がいかに家庭学習を行っていないかが見えます。俗に学年プラス1時間が最低限の学習時間だと言われますが、それさえ感じていない生徒が2年生には多いといえます。3年生はさすがに受験が迫っていますから5時間6時間という取り組みはありますが、2年生は修学旅行が終り中だるみの頃でなかなか勉強することがないといえます。これが本校における学習面での課題です。第2番目に、近年の入学生に授業をして気づいたことですが、各教科の勉強の仕方や、ノートを取り方が分からない、基本的な学習習慣が身につけていない生徒が非常に増加しています。そのため本校では入学直後に学習ガイダンスを設けて、集会等を利用して全生徒に学習方法を説明したり、初めの数時間は実際にノートを取らせたり、予習をさせたりします。それが実際にできていない生徒には教務の方で補習をしています。第3番目に地域全体に対してですが、生徒間の競争意識の欠如、それと学力の低さへの危機感の薄さを感じます。高校入試においても、近年500点満点のうち400点以上を取る生徒が激減しています。あまり勉強しなくてもどこかの学校に入れるだろうという考え方が地域の中にあると感じています。入試制度にも問題があると思いますが、都会と違ってなかなか競争心が生まれにくい地域ですので、そのような雰囲気が生じやすいとも感じています。

井藤：高校は学年プラス1時間ぐらい勉強が必要だと、小学校でも学年プラス10分勉強時間が必

要だとしている事もあります。5人の方々から、見える学力に焦点を絞ってお話がありました。学力観は全て点数で良いのかという事もありますが、自身の学力観について述べて頂きたいと思います。

庄司：私の学力観ではないのですが、学力の考え方や違う視点で話をします。保護者と教員が考える学力に差があると思います。教員が考えるものとして3つあります。基本的な知識・技能、それらを活用する思考力・判断力・表現力、学習意欲。そして数字に表れる目に見える学力と見えない学力です。保護者の方が「学力を上げてください」と言います。そこで教員が「いや点数だけではないのです」と言ったらまずいと思います。その考えは合っていますが、保護者の考えている学力ではないです。それは言い逃れになってしまう。だからそういった部分での食い違いが起こっていると思います。「勉強だけできてもね」ということがあります。学校の勉強だけできても価値は低いし、幅広い教養と生きる力を身につけていこうということだと思えます。それは合っています。そうずっと言い続けてきて、勉強そのものに重きを置かなかった教員がいるとしたら、それはすごくまずいことです。学力の考え方は合っていますが、だからといって数字に関心が及ばないのはまずいです。それから今、過度の競争を仰ぐなという言葉があります。全国学力状況調査が文科省の方から出てきたときも、文科省はそう言っていました。実際、学校間で1点を争うような競争は起きていません。でもこれは現状を見る目が甘くなっている気がします。過度な競争を避けるあまり、適度な競争すらなくなっているのではないかと思います。学校行事で「隣のクラスに負けないぞ」といいます。競争心です。館山市のある中学校のキャッチフレーズで「No.1 スクールを目指す」これだっって適度な競争だと思えます。こういったところをもっと突いても良いのかなと思います。

井藤：佐川先生お願いします。

佐川：例えば地図帳で言いますと、地図記号がわからなければ地図帳は読めません。それから歴史。その時代背景を理解していなければ、やはり興味は持てません。つまり知識をしっかりと身につけるということは大前提なのです。そしてその知識をどう使うかという力を伸ばしていかなければなりません。一つ気になるのが、「体力」という問題。20年前から言われていますが、腹筋と背筋。昔は布団の上げ下ろしを自分でやりました。しかし今

はそうではない。掃き掃除もやらない。そういった家庭の仕事をしなくなって、汗をかくことも少なくなっている。農作業を子どもにやらせることもほとんど無くなっている。一昔二昔前は体力があったから小学校2年生で100%の児童が逆上がりをできた。しかし今は、高学年でもできない、むしろ握力もないし、背筋力もない、そして体重が増えてきている高学年に逆上がりをやれといってもこれは酷なことです。できるときに身につけさせる力というものはあり、体力は際限ない訳ですから、指導者によって非常に可能性を持っていると思っています。だから学力というものは、獲得していくものと指導や環境によって獲得できるものと従来備わっているものとあるのです。本来、素質を子どもは持っている。それを開花させるときに、学校教育・家庭教育があるのだと思います。そういった見えない部分の学力、話が少しずれませんが、見える部分の学力だけで論議しますとそういった部分を見落とししてしまうこともありますので述べさせて頂きました。

井藤：先ほど庄司先生からも学力というものは、親に示さなければならぬものもある、佐川先生からは、見えない部分もあるからそこを考えていかななくてはならないとありました。それでは、この後もお話を聞いていきたいと思えます。次は柱の二つ目として、安房の子どもたちの学力向上について、どのようなことを考えているか、これから行おうとしているかお話を伺いたいと思えます。

谷：安房地域の子ども達の学力向上に向けて本校での取り組みの一部を紹介します。学力向上のためには大きな4つの柱が必要と考えます。1つ目は切磋琢磨し合える環境作り。2つ目は十分な学習時間の確保。3つ目は早期に目標を持たせる進路指導。4つ目は教員のスキルアップと授業改善。この4つを私自身と本校では学力向上のために大事なことと考えています。それに従って本校で実践をしています。1つ目の切磋琢磨し合える環境作りですが、習熟度別クラス編成を実施しています。本校では3年前から入学したときの成績によってクラスを応用クラス、標準クラスの2種類に分けて、1年生のクラス編成を行うようにしています。近年の学力格差の広がりに対して、手を打たなければと考えているからです。このように成績上位と下位にクラスを分けることにより、上位クラスは生徒の競争心をかきたててお互い切磋琢磨し合って力を伸ばしていける雰囲気づくりがで

きます。下のクラスは個々の能力に見合ったきめ細かい指導ができると。例えば下位クラスを2つに分けて、それぞれ2人の教員が細かいところまでマンツーマンで教えていくことができます。このクラス分けを初めて行った現在の3年生は、前年、つまりこの春卒業した卒業生やその前の卒業生と比較しても模試の成績が格段に良いという結果が出ています。これだけの理由ではないですが、理由の大きな1つだと考えています。2つ目の十分な学習時間の確保についてです。家庭学習をしない生徒達ですので、強制参加の者から希望者など様々な課外を実施しております。その他、朝のホームルームで毎週英語の小テストや漢字テストを行っています。最近では昼休みを使い、数学のセンター試験演習を行っています。このように授業時間以外でも生徒に接して学習させる時間・機会を作っています。さらに英語と漢字テストでは、成績が悪いと毎回放課後に追試をし、できるまで残しています。最後に安房高として大きな変更点は、来年の入学生から教育課程が現行の31単位から32単位へと増加することです。基本的には主要三教科の時間確保が目的ですが、多くの県内の進学校は32単位以上で来年以降の教育課程を組んでいます。3つ目の早期に目標を持たせる進路指導ですが、各学期に実施する進路講演会、卒業生を招いて行う合格体験記・体験談、大学教授の授業、2年生対象の模擬授業やセンター試験の指導等を行っています。早い段階で生徒達の進路意識を高め、情報を与えて各自の目標設定をさせる様々な行事を進路指導の中心として行っています。また、本校では2年生から文系クラスと理系クラスに分け、早めに進路を決めさせています。最後4つ目の教員のスキルアップの授業改善です。本校は5年前から進学指導重点校として県から指定されています。それにより県内から各教科指導に優れている教員を公募制で集めることができました。ですから高校のみならず中学校からも優れた授業実践を行っている先生方も応募して県教育委員会に認められれば、本校教員として採用される可能性があります。その点では授業のレベルアップが図りやすい学校と言えます。さらに本校では、生徒による授業評価を、教わっている全職員・全教員に対して各学期に行っています。これにより自分の授業に対する具体的な生徒の生の声が各教員に届けやすくなり、授業改善に役立っています。最後に昨年度より希望する教員

に対し、学校から補助を出しています。それにより、夏季休業中に東京の大手予備校に出向き、現役のカリスマ予備校教師によるスキルアップのための研修会に参加できるようになりました。昨年は5名、今年は8名の教員が参加して授業のレベルアップ研修を行いました。これについては多くの先生から要望が出ています。以上4つの柱に従って本校では授業改善に努力をしています。

井藤：安房高でも様々な取り組みをしているということが分かりました。渡部先生お願いします。

渡部：先程の通り館山市では「安房地区小中連携学力向上プロジェクト」の実施要綱を受けて、教務主任に学力向上プロジェクト委員を委嘱しました。そして、プロジェクトのビジョンとして安房の児童生徒の学力・習得・活用を向上させたい、そして最終的なゴールの目安の1つとして全国学力状況調査の平均点を今よりも上げるという目標のもとに今年度4月から7年次計画で実施しています。まだ1年次がスタートして模索の状態です。1年次の目標は、中学校区ごとに児童生徒の学力状況を把握し、共通な課題を明らかにし、その課題に対応する学力向上策を施行し、その方向性を掴むことです。5月から教育委員会を交えて地区学力向上委員会を中学校区ごとに行っている最中です。現在まとまった所ですと、対象とする教科、国語・数学・理科を来年度は実施しますので、それを3つ行うのか、2つで行うのか、それは中学校区ごとに取り組んで参ります。狙う学力も習得にするのか、活用にするのか、これも中学校区ごとです。市内統一ではありません。ただし、学力向上についても方法論についても実態に合わせてその方向性で今行っています。でも最終目標としては数値目標として行っていきます。確かに、数値目標だけが学力ではないことは重々わかっています。最後、身につけた技能や知識をいかに社会で活用するかの力が必要ですが、一つの目安としてそれを行おうとして動いています。今、学校ごとにおきまして小中連携した学習を目指して、例えば小中で統一の学校評価をして頂くことを目指しています。本校では夏の補習授業、実際には教科で行っています。英語の教員が「夏休みに、この日は午前中1年生、午後2年生、この日は3年生」という様に。私は数学ですが、個のニーズや一人一人の課題に合わせます。「この子は規則性の問題が弱いからこの日は規則性やるよ」のように。人数が少ないから、課題を一人一人に合わせます。

3年生では今までのテストをチェックしての補習授業。夏季の補習。これは2週間。その呼びかけに対してかなりの生徒が来ます。自分の予定に合わせて来ます。また、来週から補習が始まりますが、やはり来ます。そのような教科独自の活動を行っています。また、本校だけかもしれませんが、少人数の加配を受けずに教員の時数を増やして、必要な教科について実施しています。できることはすべて行う。その中で手を打っていく。それだけで足りない部分もあるので、地域も巻き込んだ形も必要だとも考えています。結果、どの位上がるのかは、まだ始めたばかりなので時間がかかります。ただ、今よりも上げてあげないと7年も待ってられない。校内でも動いて、若い教員が授業を見てくださいだとか、実験がわからないから色んなことを手立てとして、いろいろな先生に向けながら、教員のスキルアップ、教員の資質向上を図らなければメインの学力も上がっていかないと思います。後は授業時数の確保です。来年度から中学校では完全実施となります。それを踏まえて、既に時数を増やして新学習指導要領に合うように実施しています。それからできるだけ行事の精選をして授業時間を確保しています。予定時数の110~125%は実施しています。また、いわゆる伸びる子は伸ばしていく、下の子も伸ばしていく。下の子だけに力を入れていると、上の子は課題を欲しがります。同じワークを使っていると終わってしまいます。そのため次のプリントをその子のために用意しておくことは、手立てとして必要です。そのために最後に困るのは教員の多忙です。いかにそのような時間が取れるか。それらが課題です。様々な手立てを打って学力は伸びていくと思って実践している最中です。館山市の教育については今後数字的なことも出てくると思います。そのデータを押えておくことが必要です。

井藤：房南中あるいは館山市の教務主任会の方でもプロジェクトを組んで行っているという話がありました。続きまして、今2つは学校からこんなことをやっていますという話がありましたが、今度は宮越さんの方から、少し外から見た学校の学力向上について感じたことをお話してください。

宮越：先程、安房高、房南中からの実践を聞いて、保護者としてちょっとほっとしています。私の子どもは東条小でお世話になっているので、それについての情報しかわからないのですが、保護者の声として交えて話します。今年度から東条小では

チャレンジ学級や金曜放課後スクールなどが始まっています。チャレンジ学級は学習の理解が不十分な箇所の補習で、学習全体の復習の方は金曜放課後スクールという形で希望者を募って高学年で行っています。子どもはやはり、学校の授業以外にさらにまたなので不満があるようですが、親としては目に見える部分で授業以外のことを学校がやってくさっているのととても安心します。保護者の間では、ありがたいという声をよく聞きます。ただ、曜日も限定、時間も限定です。皆さん最近になって習い事等を多くされている方が多いです。授業数も増えて学校の終業時間も遅くなって、その後習い事という形なので、なかなか参加することができない保護者も多いです。それについては個別指導の方向でやって頂ければありがたいという贅沢な話も多々挙がっています。小学校のうちからこのような形で補習をやって頂いて、授業に最低限でもついていける、それ以上になっていけるという形をして頂けるのは、とてもありがたいと思います。私の周りでも年々共働きの家庭が増えています。だから、家庭学習や自己学習が学校側から求められますが、家庭でその時間を費やすことが難しいのが現状です。学校で、金曜放課後スクール等で授業プラス補習をして頂ければ、家庭では学習のフォローではなく、その他のコミュニケーションの時間に費やせ、子ども達の精神面の安定を図れるのではと思っています。また、ゲーム機等の問題があります。子どもはついそちらに夢中になっている現状です。家庭ではその時間を制限し、学習の方に向ける努力をしていかなければと感じます。また、自己学習や家庭学習といわれますが、保護者の立場では何をしたら良いかわからない部分があります。PTAと連携して講習会等を開いて頂いて、家庭でどのような学習をさせれば良いか教えて頂ければと思います。学習時間の目安等は教えて頂けますが、具体的な内容は分からない部分があります。自分達の時の勉強とカリキュラムも変わり、教え方等も違っています。だから、家庭学習のフォローや自己学習の方法等、保護者にして欲しい部分を明確に出して頂ければ、保護者ができる部分もあると思います。PTA等でも積極的に学力向上、保護者からすると勉強ができるようになるという事なのですが、その点ではどの保護者も興味を示します。従ってその内容の講演会をして頂き、積極的に保護者の方に協力を求めても良いと感じています。

井藤：保護者の方から見ると、金曜放課後スクール等学校が行っていることはありがたいということ、また保護者の方でもできることがあるということが挙がりました。では佐川先生お願いします。

佐川：今保護者の宮越さん、東条小の保護者からお話がありました。私は太海小です。鴨川市には、今年の4月から東条小、太海小も入って7つの小学生が進学する新しい鴨川中ができました。当初、中学校生活に慣れる事を心配しました。大きな小学校の場合はそうでもないかもしれませんが、小さい学校で心配です。例えば太海小からは12名の卒業生、方や60名位の卒業生です。そんな訳で心配しました。鴨川市は小中一貫教育という理念の中でいわゆる教職員の交流・児童の交流を行っています。もちろん教育カリキュラムの小中一貫を目指して、指導の重点を設定しています。なかなか思うようにいかない部分もありますが、小中の教員として例えば指導内容のすり合わせ等を試みています。実際には始まったばかりで、なかなかできない現状があります。しかし、小中連携研究協議会では、様々な課題が見えてきています。先ほど、保護者の立場から家庭学習について説明をして欲しいとの話があり、非常にどきどきしました。自分の学校職員に聞かせてあげたいと思いました。実はこの7小学校が鴨川中に卒業生を送り出すにあたり、円滑な中学校生活を送れるように、中一ギャップを解消するように取り組みを行いました。小中で連携して何が今できるかを考え、昨年までは家庭学習と体力づくり、ラダートレーニングを行いました。今年は7小学校で、家庭学習だけは家庭でも取り組んで頂けるようにスタートしました。実際はお家の方が困ったよという戸惑いを聞いて、やはり学校側としても説明しないと難しい事だなと思いました。家庭学習が目標とするのは、子どもの生活習慣の確立、そして今私達が話題としている学習習慣です。中学から7小学校に、要望するものと期待するものを色々出して頂きました。チャイムが鳴ったらすぐに席に着ける子にして卒業させて欲しい、勉強道具を用意できるようにして欲しい等、小学校1年生の時にきちんと身につけなくてはいけないことが出ました。しかしこれができていない子が多く、中学校で指導しようとする、なかなか難しいという声が聞かれます。ですからこの意味で、単に時間だけ勉強やれば学力がつくかということとは私にはそうではないと思っています。今、7小学校1中学という

大きい所帯で学力向上・体力向上・生活時間の確立を行っています。学力向上では、小中で授業を見合うということで、授業研があればその度に案内が来ますし、時間があればそれに参加しています。保護者の方からはなかなか見えにくいのですが、子ども同士の交流では、通学合宿が市の施策として始まっています。また、以前は残り勉強のように、できないお子さんは残すことができた時代があります。今は、安心・安全を優先し集団下校。私の学校は小規模ですが、学校での学習時間を保障し、先生方は限られた時間の中で行っています。ですから、どうしても家庭との協力が必要です。連携については、やはり大規模校は、先生の努力が多く大変です。太海小学校では、14名の学年に、担任、特別支援学級の先生が2人、教育支援員の多いときは4人でクラスの算数を教えています。以前と比べると想像もつかない状態です。この恵まれた状態で過ごしています。大規模校はそうできないこともあり、本当に苦勞されています。けれども若いときにそれを経験されているとは幸せだなと思います。これから10年、20年経ち、いろいろな問題にぶつかった時に、問題解決能力のある先生が求められます。今私のいる学校は恵まれており、落ち着いているので良いなという反面、よそに行ったときにその若い先生が対処できるのかという思いもあります。そういう意味では、あまり甘やかしてはいけないと考えます。そして、学校の中でできる授業改善が考えられます。授業改善を行いたいのですが。正直な話、1年生が2人、2年生が6名の集団で何か学習する時に、45分間発表ばかりというのは続かないです。ですから体験・作業学習を入れてみたり、1,2年と合同で学習をしてみたり、担任が工夫します。それはそれなりに教師の指導力を高めることができると言えます。この前、私がショックを受け、職員に考えて頂きたいと思ったことがありました。知的好奇心を高めなさいとよく言います。私はそういう訳で1年生・2年生に見つければ、例えばオニヤンマを取ってきたよと教室で話しました。この前はナナフシという虫を、あれもなかなか見つけれなくて、見つけてあげると子ども達は喜びます。幼稚園にしてもザリガニを持ってきてあげると興味津々なのです。ある時私が草刈をしていると、子どもが「校長先生」って呼ぶのです。何かなと思うと、「虫取り網はどこですか」と聞きに来ました。「それは理科室だから担任の先生に聞きなさい」

と言って帰りました。また来ました。「虫取り網はどこですか」と言うから、「理科室だよ。先生はいないの」と聞いたら、「いません」と言うのです。「職員室にいるから行ってみなさい」と言うと、しばらくしてまた来ました。結局、職員室の先生に言ったのだが、先生は動かなかった。要するに話を聞いてくれなかった。鍵があるのだから開ければそれで済むはずなのですが、実際のところ備品がどこにあるのか知らなかった。恥ずかしい話なのですが、そのような備品管理自体が、学習権を取得するにはどうしても必要になります。あまりそのようなことは話題になりませんが。そのお子さんは私が一緒に行き、虫取り網を取ってあげてそれでほっとしていました。つまりあれだけエネルギーがあり、「何とかして取りたいのだ」という思いを職員が叶えてあげなかった。その位と思われるかもしれませんが、いくらお金を出してもまた場を作っても、あのような知的好奇心をいつ作ってあげられるのか。もう一つ思い出したのですが、モンシロチョウがさなぎから生まれる決定的な場面が、休み時間が終わる時にありました。しかしその先生は「勉強時間です、席に着きなさい」と子ども達に見させなかったのです。だから「あなた残念だよ。」とその後、言ったのです。そのような時は小学校の担任は時間の融通がききますから、決定的な時間を見過ごしてはいけない。これが学力を高める以前に、教師としての感覚を磨いていく必要があるのではと思います。ちょっと気になることが、子どもの本当に感動している感覚というのですかね、それを汲み取ってあげられない先生がいる。これも大事なことだと思います。

井藤：ありがとうございました。教師の意識改革の話でした。最後に庄司先生、お願いします

庄司：それでは、南房総市が取り組んでいる学力向上について一つ紹介したいと思います。柱の3とつながりますが、土曜スクールを実施しています。鴨川市と同様、南房総教育委員会でも学力向上に向けて何らかの努力をしないと考えました。あの手この手として、学力向上、特に子ども自身の学力向上は子どもを取り巻く環境、一般的に言われるのは学校であったり、保護者であったり、地域であったりと。学校からのアプローチは月から金までの授業、時数を確保しての学力の向上。教育委員会はと言ったときに、先生方の指導・研修をして間接的に行っている。あるいは今年度につ

きましては、直接教育委員会が主催して、夏期講座を設けました。こういった学校からのアプローチ、教育委員会からのアプローチ。残る二つとして、保護者からのアプローチがあります。地元からのアプローチとして考えたときに、土曜スクールという発想はどうかというのを我々が考えたプランです。アイデアであって、運営するのは保護者であり、行ってくれと強制はしていません。そのプランを投げかけて、実際にそのプランを、アイデアを拾うか拾わないかは保護者の判断で行って来ました。昨年度から始めています。保護者が運営する学習会です。保護者の方で運営委員会を組織して、3年生を対象にします。3年生という丁度、空白の時期がありまして、部活動引退後、土曜日の午前中の3時間分、公民館等で学習会を開いています。今年度2年目でスタートも早く部活引退後の8月から開いています。最後に繰り返しますが、教育委員会側はプランとして、1年目はこちらが手を貸していましたが、今年は自主的に保護者が動いてくれました。南房総市すべて7つの中学校で保護者が実施できるかできないかという問題もあるのですが、希望者が集まるかという問題もありますので、実施しているのは全部ではありません。中学校の方は軌道に乗り始めているので中学校バージョンは良いと。小学校バージョンも進めようと。実は4月の校長会では小学校バージョンも動こうと思っているという話をしてあります。9月に入りまして、学校長の方から保護者のPTA会長の方に話が行きますし、間接的な話ではまずいので実際には説明を求められれば、私が出向いて行ってPTA理事会で話をします。実際に南三原小学校の保護者会に出て、説明しています。その時にも小学校バージョンの土曜スクールをやってみませんかという説明をしました。もちろんある程度のことでは行って質疑応答等はありませんが、もしよかったらどうぞという話はしてあります。中学校は意識の問題、受験を目の前にしていますので。また土曜日の午前中の空白時間ということもあり、やりやすい。小学校はなかなかやりにくい部分があって、ハードルが高い。それも土曜日の午前中の時間は塾で空いていない。名称は土曜と打っていますが、日曜スクールにしてもかまわないと思っています。それから分母の問題です。中学校はある程度規模がありますからそこから希望者でも集まってくるのですが、小学校は規模の小さい学校ではそこから希望

者では数が集まりにくいという現状があります。中学校程までにはいかなくとも、小学校にもそういう投げかけはしていくと。以上です。

井藤：ありがとうございました。南房総市の方も中学校・小学校での取り組みということでお話がありました。さて、各学校の地域や委員会、あるいはそれぞれ学力向上に向けて様々な取り組みを行ってきたということ、そのためには教師や保護者の意識が大事だというお話がありました。その教師とか保護者の意識を高めるために、どのようなことをしたら良いのかという考えを、意見のある方に聞いてみたいと思います。

谷：高校の場合はどうしても中学校との連携が図れませんでした。中学校の先生の授業を見に行き、また中学校の先生も高校の先生の授業を見に来ることでとても刺激になると思います。私も今までほとんど0回に近いです。中学校の先生の授業を見たことがないです。今、どんな授業をしているのかなと非常に興味を持っています。そういう機会を設けていくと、授業改善も含めて学力向上に向けてのそれぞれ小中の先生方の意識が高まっていくと思います。もう一つは、学習時間の確保です。ほぼ学校での学習時間は限界なのです。もう後は教育課程の単位数を増やしていくか、あるいは補習を放課後に増やして、土曜まで補習をやるしかないと思います。そうなるとうちでも生徒の負担が増えていくだけですので、残っているのは家庭学習に行き着くと思います。家庭学習というのは、なかなか身につかないものだと思います。例えば、家庭学習チェックシートみたいなものを作って、親もしっかり見てハンコを押し、それが返ってきて担任がまたチェックをする。この形で継続して行っていくことで、親も参加している意識を持ち、教員も親と連携を取ることになります。親だけ、教員だけでは難しい状況ですので、連携を持つようなそのようなチェックシートを開発していくことが必要ではないかと思います。

宮越：先程から家庭学習といろいろ言われてきました。佐川先生がおっしゃっていた家庭学習とは、生活習慣の確立だという部分がすごく私には入ってきました。今まで家庭学習といっても学校の勉強をさせていれば良いという感覚しかなかったです。しかしそういう時間をきちんと区切って、生活習慣として学習をそこに入れていくことによって、中高へ進んでいく部分ですごく大事になってくるのだなということがよくわかりました。また、

先程谷先生が言われたように家庭学習のチェックシートがあると良いと思います。親としてもやったという実感が無いと、目に見えてわからないと持続していくことが難しいと思います。だから、学校と連携が取れるチェックシート等で、家庭で学習をどれだけしたかということが目に見えてわかるととてもありがたいことだなと思いました。

森田：ここからは後半に入っていきたいと思いません。前半の方でパネラーの皆様から学力の実状と現状。そして、それぞれの方々がお考えの学力観、学力向上に向けて現在のお立場でいろいろ取り組まれていること。そして、保護者、教師の意識をどのように高めていくかということまでお話が進んできました。今後は安房地域において、必要とされること、学力向上に向けて今後どのような取り組みを行っていくか、小・中・高・保護者の方、それぞれのお立場でお考えを伺っていきたいと思います。庄司先生お願いします。

庄司：安房地区の中で「連携」という言葉がキーワードになっていくと思います。南房総市のお話をします。先ほどの土曜スクールは保護者と地元の連携の一つの例なのです。先ほど渡部先生からお話がありましたが、南房総市でも小中連携の学校区の取り組みをしています。もともとは指導主事の会の中で、安房地域全域でやろうという話になっていました。7年間というのは今年度入った一年生が中学校に入るという長い期間です。そういった意味での一定の物を残していこうということでの小中連携です。今までは小学校のデータ、あるいは実態等が中学校にうまく上がっていない、中学校が小学校の実態が見えていない、そういった意味での小中連携。先ほど学力状況調査の結果のお話をしましたが、それもこの一連の流れの中の話です。それと関連するのですが、一つの例として南房総市内は7つの中学校区があります。いろいろなバリエーションがあるのですが、今年度連携した上での見える形で目標を示すということを投げかけたところ、ある中学校区では、こんなことを持ってきました。「目標評価テストや検定試験で数値目標を作り基礎学力を作る。」これが小中連携。例えば当該の小学校では、県の標準学力テストで1年から6年の国語の平均点を2点アップさせる。前年度に比べて。国語の言語事項の正答率を2点あげる。それに関連して中学校ではどうするかというと、中学校は、漢検で1年生は50%以上5級以上を取得。2年生の場合には50%

以上が4級以上を取得。3年生においては、50%以上が3級以上を取得。という数値目標です。小学校において、国語の言語事項に関わるものが中学校における漢字検定での検定試験の結果。中学校では千葉のやる気ガイド、学習ガイドというのが県の指導課で出されていますが、「配当漢字90%以上の漢字を全生徒に読み書きできるようにさせる」という数値目標を挙げています。これが小中の明らかな連携。そもそも平成20年の1月17日、中教審の答申にもありますが、「語学や漢字などの各種検定の取り組みなど具体的な目標設定することも重要である。これが、学習意欲の向上にもつながっていく。」ここにも繋がっていく訳です。このように、目に見える形の数値目標を作りながら小中連携していくようにという話をしています。もちろんこれは一つの例でして、我々が意図する物は授業参観、授業交流です。参観でしたら見るだけですが、交流でしたら免許がなくてもT2なら授業ができますので、小学校の教諭がT2で中学校の授業に行けますし、中学校の教諭が兼務発令しなくてもT2ならば小学校の授業ができる訳です。そういったことの話もしてあります。もっとベーシックな部分で学習習慣、学習規律。そちらの方もきちんと小中連携していく。むしろこちらの方が手っ取り早く取りかかれることであって、しかも一番重要だと思います。私自身はもとより、南房総市教育委員会はその部分を強く押し出したいと思っています。今、小中の連携について話しましたが、高校との連携が難しいと思っています。どうやったら良いかと思っていたのですが、私見で考えたのですが、例えば唯一中高で連携が図れるものとして、プラスのイメージで部活だったらできるかなと感じます。ここにも中学校の先生がいますけれども。例えば、中学校でしたら高校に練習場所を求めて電話一本で行けると思っています。また、高校側からすると地元の子を教えたいとか、地元のレベルアップを図りたいとか、もっといえばうちの学校に来て欲しいとかあると思うのです。そういうところで簡単に中高の連携を図ることができるのと思っています。また、学力向上の学習会のようなものでも簡単に教員同士の連携が取れたら、こんなすばらしいことはないと思います。中高一貫教育、中高一貫校ができたら一番良いのですが、そこでどうしたら良いのかと考えるよりは、もっと簡単にできそうなものから始められれば良いかなと考えています。

森田：お話の初めに、「連携」という言葉を頂きました。今後の話し合いでもその話が触れられるのではと思います。小学校、中学校の連携ということで考えると現在教育委員会にいらっしゃるお立場で進められていることについてご紹介いただきました。続きまして、佐川先生お願いします。

佐川：これから必要とされることについてどのように取り組んでいくかが柱となっています。鴨川の場合は今小中一貫で学力向上を目指して、ここ数年間カリキュラムの方を改善しながら取り組んできているという話をしました。この一貫ということが例えば小中連携と小中一貫。小中の連携は鴨川の場合は昔から各中学校区単位で進んできた訳です。当初、教育現場に一貫という言葉が入ってきたのが中高一貫。例えば中学校と高校が一緒に一貫して特色ある教育課程を学習していくということで、高校受験や学習の時間も当然ですが、内容も他の学校と違うという特色を持って一貫教育は始められました。小中の場合は、中一ギャップを解消し円滑な中学校生活を送れる事がまず一つ大事な事だと。子ども達が、不登校の問題や家庭の問題を背負って来ていますので、スムーズな形で15歳まで送れることを目標にしています。今日は研究紀要を持ってきました。これは、鴨川が、今から43年前、鴨川町だった頃の昭和43年に学力向上推進地域という指定を受けました。その当時鴨川町にある旧鴨川中と4小学校が一緒になって研究をしました。そのとき太海小は道徳教育の推進をしていました。当時の先輩方の学力向上についての研究は、小中一貫した課題という言い方をしていました。つまり小中が共に解決しなければいけない課題は何なのか。この中では、鴨川町としての課題は何なのか、例えば人材が流出しないように学力をつける、地域に貢献できる人材を育てる、そういった課題で小学校ではどこまでやればいいのか、中学校では何が必要なのか、それを研究されていた経過がありました。鴨川市になって40年たっても、また同じ一貫教育の課題が出て、そしてまた学力向上の課題に当面しています。歴史は繰り返すのかなと思う反面、その都度その都度そこに先生が目前の子どもから課題をいかに掘むかが大事だと考えます。この研究紀要の中でこんなことが書いてあります。これから要請される三つの力。学力向上で要請される要因がこの紀要にある。第一が教師へ望む力。そして、教師の教育力こそ学力向上の源泉。連携という課題も

出ていますが、連携の前にまずは教師の指導力だということここでは言っています。この当時、1クラス40何人の中で懸命に頑張っていると出てきます。小学校も中学校も算数、数学でどう一貫させたら良いかという研究をしています。二つ目の要因は児童生徒へ望む力。学ぼうとする意欲、学び方を知る、身に付けたものをいかに生かすかという問題解決の姿勢、それができる力を育てると書いてあります。この中では、例えば子ども達の生活経験が、昔と比べると遊びが少なくなったとか。お金を出せばできることで遊ぶようになったとかいろいろな問題が出ています。日常の中で体験する機会が少ない中で学習力をアップするのは、昔からあるのです。三つ目に挙げているのが地域社会へ望む力。地域社会が社会の諸条件を整備してより良い環境と教育システムの中で育て上げて初めて学力向上ができる。先ほどの土曜スクールにしても保護者との家庭学習の連携にしても、ボランティアとしていろいろ入ってきている。教育委員会の行政からの支援が支えになっているというのが、40数年前に先輩から教えて頂いた。今、安房地方で当面していることは子どもの数の減少です。学校の統廃合など課題として大きい物を背負いつつあります。統廃合までいなくても、本校のように小学校1年生が2名、2年生が6名のように、そういうクラスが近隣でもだんだん出現している。一方では、その地域に住んではいても、区域外通学で他の所に行って勉強させる。理由は、例えば勤め関係とか。共働きなので家に帰ってきたら留守番になってしまうのでおじいさん、おばあさんのところから通わせる。という理由で学区を変更される。形は違いますが学校選択がすでに始まっている。私たち教員は当然そういったことを踏まえながら学校の中で子どもに力をつける取り組みをする必要があると考えます。二つ目が、ここに研究所の先生方、所員の先生方、大変若い方がいるのであえて話すのですが。安房地方では、ベテランの先生と若手の先生と、本校の場合では15人いる職員で40代後半から50代が半分、30代前半から20代が半分。あと3,4年たつと今35,6歳の先生が当然、教務の先生や研究主任をやってもらわないといけない。研究所で学んで、やはり学ぶことがとても大事なのだと感じます。先ほども話しました通り、平成の初めに所員だったのです。3年間お世話になり、そのお陰で今自分がここにあると思っています。あ

の当時、私は公開研究会を8回経験しています。片手で子どもを抱いて、右手でご飯を食べて、ご飯を置いてペンを持ってレポートを書きました。そんな教材研究なり公開研の指導案検討の苦労も研究所ならではのことと思います。私の場合は昭和50年。その前の先輩の話では、例えば学校が終わってから飲み屋に行って、一杯やりながら指導案を考えたのだよとか、学校でストーブを囲んで子ども談義をしたのだよ、という話を聞いています。今はインターネットで検索すれば指導案が出てくる。あまり考えなくてもできてしまう。本来教材研究というのは、やはりある拘りを持って子どもに何を教えたいかを見つけるためなのですから、そういったものがあって初めて先生が子どもに教えられる、教えようという気持ちも湧いてくる。そういったことをしながら、あと数年たったら学校運営に携わる立場として研究所の先生方には頑張ってもらいたいと感じています。

森田：佐川先生からは、鴨川がまだ町だった頃の学力推進協議会の紀要をご紹介いただきました。教育の不易と流行ということで不易の部分に、なるほど私も改めて思いました。お話の中でキーワードとして連携と一貫は違わなくてはならないとありました。今後お話が進む中で連携と一貫ということで出てくるかと思います。続きまして、宮越さんお願いします。

宮越：保護者代表でここに座らせて頂いて、やはり、学力。目に見える学力ということで今日はお話をさせて頂きます。私自身は岡山県出身です。岡山県の方で今、県立の中高一貫校がどんどんできています。やはり、私立の中高一貫の教育の方に目が向けられています。今は家庭としても手取り足取りやって頂ける事等、学校に求めるものが多く、またそれに見返ってくるものが私立の方が多くあります。岡山県でも中高一貫に行くなら私立にという形になってきています。もちろん、千葉県と同様に県立のトップクラスの進学校もあります。そこにも、ここ数年において中等部ができました。中学、高校、親としては二度も高校、大学と立て続けに受験させるよりも、中学で一度頑張っておいて、そのまま大学進学に向けて6年間ゆったりとした中で教育させて頂きたいという気持ちがあります。ここにきて思ったのは、安房地域には中高一貫校が無いということです。もちろんメリット、デメリットがありますし、私自身まだ子どもが小学生ですので、きちん

とした情報がここでご提示できないのですが、外から見た感覚としては、中高一貫でゆっくと6年間を通して大学受験に向けて教育して頂きたいと思います。親として思うことは、公立の小・中学校の先生方がとても親身になって子どものことを見て頂いていることです。精神的なフォローをしっかりと頂いている事に加え、勉強の面でも上を目指していきたいという思いがあります。だからそういった形での進学を目指した一貫校がここにできたらありがたいなという思いがあります。安房地域自体、東京から1時間半もすれば来られる場所ですので、ここから都心に子どもが流出してしまうというのも問題ですが、その子ども達が残れる環境を作って頂きたいと思います。そういう面で充実した学校ができれば、都内からこちらへ引越してくる子どもも多々あると思います。魅力的な学校にして頂ければ徐々に子ども達の良い面での競争も始まってくると思います。競争が始まってきたら学校自体の連携も学校同士の競争も出てきて、学力も上がっていくと思います。保護者としてはそういうことを希望しています。

森田：保護者の立場からということで、ぜひ安房地域に中高一貫の学校が欲しいということ。都会に近い安房ですが、ご存じのように君津から先は交通の面も・・・ということが以前からありました。とても良いところであることは皆さんご承知おきなのですが、ぜひ制度の面でも充実させることで学力向上を図っていけないかというご提案でした。続きまして渡部先生お願い致します。

渡部：小中高保護者で取り組まなくてはならないことと書いてあります。小学校も中学校も高校も保護者も、子どもの健全な成長や学力向上のためには必死にやっているとありますが、やはり連携が必要だと思います。この時代少子化で一番は家庭の教育力の低下があるかと思います。私は出身が秋田県です。秋田県はここ数年全国学力状況調査で一番です。最近これを受けまして秋田の本を読んでもみました。実は秋田県から25年前に来まして、私が勤務した高校は底辺校でした。ボーダーは250点でした。その当時25年前、250点切ると高校に入れません。そういった子は中学予備校に行きます。予備校は全県に1校しかありません。私立校はその当時全県に3校しかありません。しかも秋田市だけ。どういうことかといいますと、落ちたら中学浪人です。そして次の年、後輩と一緒に受けます。ということを考えますと、全国学

力状況調査などいろいろいっていますが、私の認識では高校を落ちると次がありませんから必死に勉強します。ある意味中学3年間の勉強の仕方は必死です。親御さんも必死です。ということを考えますと、教育も確かに変わったと思います。鹿児島県か秋田県が、中学浪人が一番多い。受け皿がないという状況がある。いろいろな本を読みますと、確かに家庭環境がやはり安定しています。核家族が少なく、夕食を一緒に食べる。ただ秋田県は収入が少ない。ですが、わりと一緒にご飯を食べる。地域の行事に参加する。PTA活動盛んです。家庭を巻き込んだ教育をやっていかないと学力は上がってこない。基盤は家庭だと感じます。睡眠時間、食生活、家庭学習、家庭学習の進め方。小学校との連携。例えばある小学校では、チャイムが鳴ったら道具をそろえる。中学校ではチャイムが鳴ったら授業が始まる。そのギャップを解消しないと、ぐちゃぐちゃになる。小学校でどんな指導をしているか中学校は知る。小学校での宿題の回収の仕方。小学校だったら朝来たら机の上に置いておく。中学校ではなかなか把握ができない。だったら工夫をして各教科朝あげておいて担任が把握するなど。小中の文化の違いや、やり方の違いを連携で解決する。ということをしないと学力は上がってこないということで、今いろいろな取り組みを始めようと努力している。庄司先生が、高校とは部活動では簡単にできると。教科において、何ができるかという、各サークル、教科部会で夏休みなどになったときに教科ごとといったら良いか、学校ごとでできるかと考えます。授業研をプッシュしますがなかなか行けない。授業を担当していると実際高校まで車での往復はなかなか行けない。だったら夏に例えば、高校の物理の先生と実験をする。サークル同士のつながりなら可能な。そのような取り組みができればなと思います。液体窒素を使った実験は中学では道具がない。高校に行けばある。教科部会で学習会をやる。若い先生で10年前の学習と変わります。理科の場合ですと中学で学ばないと高校で物理や化学をとらないと、学習をやらない。教員になってわからないとなると苦労する。年配の先生と高校のノウハウを共有する。そうやっていかないと学力向上はしない。学年主任をやったとき保護者に対して、「学校の悪口は子どもの前で言わないで下さい。文句があったら直接言いに来てください。」とお願いします。子どもの前で言うとお互いの不信感

に繋がります。教員も同じです。直接コミュニケーションをとることが大事。また保護者には、「子どもを叱る前に誉める努力をしましょう。」と言います。子育てのノウハウを共通します。子育て支援ボランティアとか保育所、幼稚園、地域で子どもを育てるノウハウ。小学校については地域を調べる。中学校については地域のために何ができるかなど、総合的な学習の連続性など、いろんな連携を考えていかないと学力は本当に伸びない。少子化になって子どもがいない。活動が低迷化する。子ども会の存在が消えてしまう。そこで子どもが消えてしまうと地域との関わりが途絶えてしまう。思いは同じなので、教師が変わらなくてはいけない。そして子どもが変わって、学校が変わって、地域が変わる。それが本当の学力だと思えます。見える学力を作るし、見えない部分の人間性もついていくと思います。子どもを取り巻く環境も複雑化しています。携帯電話やゲーム等の指導もいろいろなことでやっていなくてはと感じます。秋田と似ているのが過疎化と小中連携です。秋田は大規模校を全て解体しました。私が行っていた学校は1600人いました。その学校を3年で解体して、中規模校にしました。いろいろな行政サイドの協力も必要かなと感じました。

森田：渡部先生のご出身が秋田県であり、家庭との連携がやはり学力を高めるのではないかという説得力のあるお話でした。小中連携、各学校文化や各発達段階を乗り越えての共通理解。知ることから連携していけるのでは、中高では教科部会での連携を中心としてできるのではないかと具体的なお話をいただきました。谷先生お願いします。

谷：安房地域において必要とされることというテーマなのですが、キーワードは、やはり「連携」だと思います。ここでは連携を含めて、個人的な願望、意見を述べます。まずは、中学校と高校の先生方での情報交換をする場です。話には出てきていますが、その機会を設定することが重要であろう。小中の間ではやりやすいと思いますが、今までの中高の連携は一時的に指定された日はあっても、それ以外は継続的に行われてはこなかった現状があります。それに関連するのですが、授業公開や研究授業が平日に行われるということが原則で、休日実施は無かった。今後はそれも考える必要があると思います。渡部先生の話でもありましたが、平日の授業公開では小中の管理職の先生方は参観に行けますが、一番の当事者、見な

くてはいけない教員達が自分の授業があるために見に行けないのが実状でした。ですから、高校が休日に授業公開を行うことで、今までより多くの中学の先生方が授業を見合うことが可能になると思います。授業を見ることで中学校の先生方は、自分が教えた生徒が高校ではこういう授業を受けることになるのだから、もっとこういったことを教えておかなければいけないということがはっきりわかるでしょう。逆に高校の先生方はこういった授業を受けている生徒が入ってくるので、今まで教えてなかったこの点も新たに教えなくてはいけないとか、この点は教えなくても良いということが、はっきりとわかってくるのではと思います。それで自然に授業の橋渡しができてくるのではと思う訳です。家庭学習の習慣化も大事だと思います。保護者の協力が不可欠であろう。小学校時代から、学校から帰ってきたらまず、何をするよりも先に机に座らせていく事を、発達段階の初期から習慣を付けさせて行く必要があると個人的に思っています。家の子どもを見ていますと、こんな宿題で良いのかと思う時が多々あります。私自身もそうですが、小中高校とも宿題をもっとたくさん出しても良いと思います。次に夢のような話ですが、宮越さんの話にも出てきましたが、莫大な経費と壮大な計画が必要になりますが、安房地区に公立の中高一貫校を作るということはすごいことだと思っています。この地区に小中一貫校というのはありますが、せっかく育てた優秀な子達が安房地区以外の高校の私学に行ってしまうという現状が少し見え始めています。高校まではこの地区でしっかり育てあげていきたいと思っています。学力向上を謳うのであれば中高一貫校の方が一番の早道だと思います。話によると、中高一貫校では中学3年間で各教科約100時間から200時間授業数が増加すると言われていています。高校入試の空白が無いということが非常にメリットになります。当然中学校から受験がありますので、小学校時代から競争心が育まれていくメリットもある。あとは、大学受験に対応した柔軟なカリキュラム。高校2年の間で教科書を終わらせて、高3はがんがんと大学受験に向けて勉強をやらせる。いろんなことができると思います。実際的な面を考えると、この地区だけの生徒募集では先が見えて来ますので、どうしても他地区から募集をしていかななくてははいけません。そう考えると量が必要になります。そうすると、そこまで県がお金を出してくれるの

か考えますと公立では難しいかと思えます。やはり私立の学校にやってもらえないのかとも思いますが、公立の教員としては忸怩たるものがあると感じています。最後にこれは高校では可能かと思うのですが、土曜半日の授業復活です。週休二日制を否定する訳ではありませんが、高校では総合的な学習の時間や情報科のように新しい教科が教育課程に位置づけられました。それにより以前のような教育課程が組めなくなり、主要教科を削減したり、7時間授業という日を増やしたりしていくことでしか授業数の確保が難しくなってきた現状があります。高校では、近年県教育委員会の方が土曜日に授業を行うことに関して多少柔軟な対応が見え始めています。実際、県北のある市立高校では近隣校との統合を機に教育課程を大幅に変更して、毎日7時間さらに土曜2時間で37時間という考えられない時間数で授業を行っています。その結果、私が安房高に来る前には偏差値で安房高よりずいぶん下にいましたが、とうに抜いて、国公立大学に40数名入るような学校になったという成功例もあります。もちろん授業数を増やしただけが上手くいく秘訣とは限りません。当然授業の質というものがありますが、やはり主要教科の授業時数を確保していくのが最も大事なことと思っています。こういった土曜日復活の努力を全国で無理ならば、安房地区だけでもその実現に向けて可能性を探っていくというのも一つの手なのかなと感じています。

森田：現在高校でいらっしゃる立場からも中高一貫校があればということでお話をいただきました。中高の具体的な連携の休日の授業公開等また、土曜半日授業を実施していけたらという具体的な策もいただきました。お話いただいた中に小中一貫、中高一貫教育のご意見が多く聞かれました。具体的に進めて行くにはなかなか難しいのではないかとあります。しかし、中高一貫、小中一貫をイメージしたときに今具体的にどう取り組んでいけることがあるか、最後にお話がありましたら、ご意見を聞かせていただけたらと思います。渡部先生いかがでしょうか。

渡部：小学校中学校は、要は異文化だと思う。小学校ではきめ細かい指導を中心にする。中学校では専門的な指導をする。お互いに認め合う、お互いに歩み合う事をしないとぶつかると思います。例えば一緒に研究をやっていて中学校はなぜ7月に研修の時間がとれないのか。実は中学は夏の総

体があって生徒がいる。生徒を帰してまで研修はできない。分かり合えない部分もある。近くの小学校に足を向けてお互いに最初は職員同士の連携や交流を始める、それから子ども達の連携などできることから始める。例えば合唱コンクールや合唱祭をやってみる。もしできれば、運動会を一緒にやってみる。運動会をやるにはリスクもある。6年生のリーダー性など中学生に奪われてしまうというリスクもある。そのへんは考えなくてはいけないと思いますが。ゴミゼロ運動やボランティア活動を一緒にやってみる。要は小学生と中学生と一緒にできることがあると思います。小学校の外国語活動を、中学の英語教師を講師として派遣してもらって一緒に活動できるとか。近くの小学校から、まずは職員交流を始めて、児童交流を始めて、それから学習規律などできることから始める。一気にやると非常に難しいと思います。そういった連携でやっていくのも手法の一つだと思います。中高では教科の専門性だと入りやすいと思います。ただ一貫教育になるとハードルが高いと思います。連携から始まってだんだんと一貫教育を目指す地区もあるだろうし、連携だけで終わるところもある。だったら幼稚園も含めてできる。うちの地区では今ぼちぼちとスタートしました。小中のお互いが異文化という意識をしないとぶつかりあって苦労すると思います。やはりお互いに歩み寄らないといけない部分があると思います。教師サイドの意識になると思います。

森田：私の個人的なことですが、忽戸小なのですが、先日千倉中学区で千倉中の合唱コンクールに小学校6年生が行って参りました。そんなこともこれからできるかなと今お話を伺っていて思いました。それではパネラーの方々から貴重なご意見をたくさん頂きました。お聞き頂いたフロアの方もお考えになっていたと思います。質問やご意見をここで頂きたいと思います。

安房高の唐鎌校長：安房高の唐鎌と申します。私、昨年の4月から安房高校に勤めておりまして、この地域は初めてです。外部の人間であるが故に、内部の方には気がつかない視点があるかと思えます。心から言ってしまうので、お気に障る部分もあるかもしれませんが、ご容赦ください。まず、中高連携なのですが、本当にその通りです。今回、初任研の一貫として初任者にこのシンポジウムに出てもらおうかと思っておりましたが、あいにく授業があり来られませんでした。もしできた

ら、高校にもこのような催しをご案内いただければと思います。先ほど、房日の松山さんがおり、「せっかく地域の新聞として、房日新聞があるのだから、もっと根本的な過疎の問題だとか、教科書の問題とか、高校ですと健康の問題等を取り入れたらどうだ。」って言ったら、「いや、やっぱり、新聞は皆様に夢と希望を与えるものです。」と言うので、しょうがないかなと。それで、安房拓心の総合学科って何だって聞かれた場合、ずっと答えられる人は、実は高校の教員でもあまりいないのです。もっと言いますと、中学校の指導要領。私は英語の教員なので英語のことは見えるのですが、総則などは見たことないのです。おそらく、中学校の先生も同じように、高校の指導要領なんて見る気もしないと思います。まずお互いを知るために、このような機会に文書を出してみることも行ったら良いと思います。もう一つ、安房高には将来教員になりたいという子どもがたくさんいます。授業時間は無理だとしても、夏休み等々にちょっと出身小中に行って、何かお手伝いのものを、丸つけでも何でもいいので、できたら良いと思います。実は長生高校はかなり行っています。様々な問題はあると思いますが、そのような事を行って行けたら良いと思います。それから、2番目ですが、先ほどどなたか「客観的なデータを積み上げなければいけない」と言っていました。この安房教育研究所が長い歴史がありますので、どのくらいのデータがあるのかわかりませんが、びっくりした点が沢山あります。少し申し上げると、高校入試の発表。今回は、3月7日でしたが、翌日から1ヶ月間は自分の点数が何点だったか教えます。入学選抜の結果の高校開示。若干刺激にもなりますので。今年は安房高校に点数を見に来た人は、1名なのです。本当にびっくりしました。例えば千葉市の高校ですと、ごく普通の学校でも3桁とか、「うちの学校半分ぐらい来たよ」と言います。自分が何点取っているか。それは、中学校の先生が「後輩のために、データを調べて来なさい」というところもあるし、あるいは、塾等が景品をあげて、「点数教えてくれたら何々、ご褒美あげる」とかありますが。さらに今回は、10年ぶりの学力検査です。前期も後期も教科がありましたから沢山来るだろうと、事務室の人と窓口どうしようかなと思って万を持して待っていましたが、1名でした。そうするとこの子たちは、自分が何点取っているか知るのには、結局自己採点でしかな

いのです。もう先生方お分りの通り、点数の低い子ほど自己採点が甘いのです。もっと言いますと、中学の先生方はそのような曖昧な点数でデータを取っていらっしゃるのかな。例えば、この子は何点取ったからここに受かった、失敗した、という後輩たちのためのデータって何だろうな。ですからお願いなのですが、全部の公立高校で行っていますので、次の入試からは受験生に「何点とったか聞きに行きなさい」って。そして調査書のコピーは10円でできますので。調査書のコピーは、中学校の先生が「まずいです」と言われたら分かりませんが、点数だけはやってみてください。そうしないと、一体自分は何点で3年間でどのくらい向上したのか、あるいは低下したのかかわからないと思います。もう一つ、非常にこの地域はゴシップが大好きなのですね。ゴシップが生きながらえる最高の道というのは、データが無いことなのです。例えば「安房高に行くと、医学部に行けないよ」と。(医学部) いますよね。もう一つ先ほど谷先生がおっしゃたように「安房高がふがないから、例えば木更津地区の志學館や木更津高校に行っている子がいるのです。」「わかりました。では先生、何人いますか」「え、そのようなデータはありません」でしたら、やめて頂けませんかと言いたいのです。そういうことがあるから噂は流れていくのだらうと思います。それはもちろん、安房高を蹴って向こうに行ったという客観的な調査はできないと思いますが、ある程行って頂きたい。私はそのようなデータが無いもので。昨年度、木更津高校に安房地区から何人行ったか。17名です。その大半が鋸南と富山中なのです。その2つの中学校は、もともと向こうに行っています。私の今の雌雄決戦の場は、富浦中かなと。富浦中の生徒、こちらに来てもらいたいなど。そのようなデータを積み重ねて行って欲しいなと思います。実は長狭高も同じで、「長狭がふがないから文理開成行った」とか「木更津の方に行った」という。そういうデータを頂けたらなど。そうしないと毎年、家庭学習やらないなとかで終わってしまいますので。具体的なものとして、入試の高校開示。ぜひ中学3年生に聞きに行きなさいと言って頂けると良いと思います。最後にもう一つ。今、高校で保護者の職業を調べる学校はありません。ところが安房地区はまだ調べています。本校の29.5%。今年も、去年も3割が公務員です。おそらく、公立高校132校ありますが、こんなに公務員の率が高

い高校はないだろうと。こういった教育の話を突き詰めていくと、最後は扶養とか就職とかが大きな問題。私は一応進学校の校長ですか、安房高から良い学校に行ってもらいたいと思っていますが、その先の22歳の壁というのがあります。この子たちが大学で就職するときに、民間に入れるかな。そうしたら、道は公務員しかない。民間を選べば、親元を離れなければいけない。だからこそ逆に、学力をつけてもらいたい。一番この地区で安房高が変わらなければと十分思っています。申し上げる通り、色々なことをやっています。目的は、一緒だと思いますが。夏休みに河合塾が来て、10日間補習もやっています。南房総市の土曜スクールをまねしています。ここはPTAが主催しています。今年、河合塾の講座に長狭の生徒の参加も認めています。長狭の校長から、「このようなことは、お金がかかる。安房高がやっているのなら、行ける生徒だけでも預かってもらいたい」「いいですよ」と。本当にこの地域一体となって、小中高だけではなくて、塾でも私は十分に連携が図れると思います。君津にある神子学院の本部に行ってみました。いわゆる民間ベースで見た安房高の良さといったら、さすが民間の人はすごくて2日間ぐらいでA4版のレポート4枚。それが、的を射ているのです。そういうことで、来週公開授業やるのですが、明光義塾と神子から6名、ほかの単体の中学高校よりもはるかに多い人たちが学校に来てくれます。そういう地域を縦軸、横軸との連携等もしなくてはいけないと思いました。

森田：大変貴重なお話をありがとうございました。では、ここで最後にパネラーの皆さんからぜひこの機会に皆さんにお伝えしたいことがありましたら、お願いします。

谷：本日は様々な立場の方々のご意見を聞くことができ、大変参考になりました。本日出てきた学力向上とのキーワードの一つに連携というのがあります。「小中連携はしやすいけれど、中高は、なかなか難しい」というご意見がありました。何とか実現しなくてはと考えています。まず目の前のできることから一つ一つやっていくことが全体を変えていくことに繋がると思います。今回この座談会に私が出る前に、本校の主要3教科、英数国の先生方に高校入試までにつけてもらいたい学力についてアンケートをとってみました。その結果ですが、数学については、「計算力をとにかくつけてもらいたい。他には証明問題などに最後まで

取り組む粘り強さ」ということが出ました。とにかくドリル学習がちょっと足りない。国語については、「とにかく読解力です」と。これは、昨日同じように学力向上を考える会に出ていたのですが、その分科会に出ていたある大手予備校の先生が言っていました。「とにかく文章読解力があまりにも無い」と。「それは小学校から積み重ねるものなので。今、小学校で英語やっていますが、英語やるより国語やる方が課題である。」と言っていました。英語に関しては、「今どうしてもオーラル指導の方に触れがちですので、語彙力と文法力をつけてもらいたい」と。「高校に来ると、センター試験で3倍以上を覚えるのは非常に大変だし、それから文法事項もちょっと足りないという気がします」という話です。こういったことの情報交換も中高連携が可能になれば、その場で毎回毎回できるようになる訳です。ぜひとも中高の連携というのも異校種間の交流を盛んにしてもらいたいと願います。

森田：渡部先生お願いします。

渡部：自分自身勉強になりました。自分が教員になった時に、熱い思いがありました。それを忘れないで、やはり頑張ろうと思います。初心忘れるべからずだと思えます。私も忘れかけていたのですが、若い人を見ると、「やらなければ」と思えます。要は、教師が頑張らないと結局変わりません。うまくいなくて、だめだったらまた新しいことを考えていきたいなど。目の前の子どもは卒業したら終わりですので、今何かやらなければいけない。そういう感情を受けながら、また私も色々なことをやっていきます。学ぶ機会を頂ければありがたいです。

森田：ありがとうございます。宮越さん、よろしくをお願いします。

宮越：今日は、お呼び頂いてありがとうございます。こういう形で、公立の小学校、中学校、県立の高校の先生方のお話を聞く機会は、なかなか保護者の立場ではなかったことです。こういう形で、もっと積極的に保護者の方にも働きかけて頂ければ、ありがたいと思います。あとは家庭学習。今回いろいろな先生方のお話を聞いて、やはり家庭での時間の確保というのは大切だなと感じました。そういうことをまた保護者の方にも開示して頂いて、みなさんに情報提供していただければありがたいと思っています。

森田：佐川先生、よろしくをお願いします。

佐川：今日は、勉強させて頂きました。先だって、

評論家の人から話を聞きました。安房地方ではないですが、「あまり勉強させると困るのだ」という意見がありました。「過疎地において、学力が高いと地元に残らない」と。だから、程々にやらせてもらえないかという冗談のような本当。地元どうするのだよという思いでされていました。安房地方も実際、若い人が少なくなっているのは、否めない現実です。勉強ができる子ほど行ってしまふような所もあります。学校というのは、学力をつけることが一つの使命です。しっかりした勉強ができて、初めて自分が生かせるような人になってもらえれば、それに越したことは無いと思います。それと、南房総市さんも館山市さんも、副読本を作っています。郷土の良さを知り、郷土がこれだけ古くから栄えていたということ、副読本を通して学習させています。鴨川市は残念ながらそういうところまで行っていません。私なりに作った物がありますが、まだ立ち上がりです。やはり郷土の良さや伝統等、そういったものを知らないお子さんが、例えば勉強ができたと言ったとあって、郷土の支えに果たしてなり得るか。やはり難しいなど。鴨川学のように、要するに鴨川の自然とか社会・歴史とかそういうことがわかっていて、初めて一つの学力とか人間の生き方になっていくし、郷土をいざれ守ってくれる人間になってくれると思いつつながら、本校は取り組んでいます。そういうことが、小学校、中学校へと連携されて高校へと。今日は見える学力が表面に出ていました。私は、3年間ここにおいて、30何名所員がいました。最初の時に怒鳴られました。なぜかという、遅刻した所員が一人いたのです。土曜日の午後で、勤務時間外です。この研究所の所員に選ばれたということがどういうことなのか、その時初めて知りました。お金を出して頂いて、勉強させて頂いて、学校から離れて研修できる。なのに遅れてくるとは何ぞや。つまり30何名の所員の時間を奪った。そして真摯に勉強するということを都合できなかったのかという。いろいろあったのでしようけれど、最初に叱られた場面がありました。我々その時の所員は遅刻するような者はいなくなったし、何か一つの問題に拘る所員が非常に多かった。このようなことが印象的でした。今日は学力の問題で、古くて新しいと最初に言いましたが、学力というのは、最初は学力（がくりき）という日本語であったのです。それからずっと、200年来議論されている。そういうこと

を現場で研究できる場所ってというのは、私はこの研究所だと思っています。今、所員の方には期待をしたいと思い、そんな話をさせて頂きました。まだ、一貫教育など課題が多い中ですが、力を合わせながらやっていくのは大切なことです。またよろしくお願ひしたいと思います。今日は、本当にありがとうございました。

森田：では、最後に庄司先生お願いします。

庄司：今、佐川先生の話に出てきた、「あまり勉強すると人が出ていってしまう」と。確かにそうなのです。今、高校卒業時点で優秀な人材が減ります。中学卒業時点で優秀な人材が減っている。非常にゆゆしき問題なのです。その中で「村を育てる学力」というのがあります。今、先ほど「勉強すれば勉強するほど地域を捨てていく」。これは、「村を捨てる学力」。そうではなく南房総市では、「村を育てる」、こちらをやっています。南房総市、どうしても限定された話をしていますが、そちらのイメージがすごく新聞に出て強いのですが。今日は見える学力。実は両輪で、一つは地元に残っても離れてもどこに行っても通用する学力の育成。今日話した内容です。それからもう一つは、南房総学という言葉を使っていますが地元に残っても離れてもどこに行っても地元を愛する愛着心を育てる、こちらをやっています。こちらについては、今日は話をする時間がなかったので割愛させて頂きますが、こちらに明治図書の東井義雄先生の本、こちらの形の学力がつけば良いと思います。まとめとして言いたかったのは、教員の意識がすべてかなということ。これは学力だけではないと思います。教員の意識といった時、教員自ら思っている意識。それから、職員同士の周りの意識、2種類あるという気がします。例えば、「教育の結果、成果はすぐに出ない」それは正しいと思います。ただ、それは教員自らあまり言うことではないし、ましては保護者に対してあまり言うべきものではないと思います。例えば特に学力に関して、「そんなにすぐに成果は出ないのですよ、お母さん」と言ったら失礼じゃないですか。そんなばかなことはないのです。例えば中学校の先生。部活動で、1年間で結果を出そうとするではないですか。半年か1年間。そういう意識を変えていかなければいけない。要するに成果は確かに長いスパンを見なければいけない。それは正直言ってわかりますし、そう思っています。でもそれは周りと言う言葉であって、教員自ら言うてはいけないし、

学力に関しては短期間で結果を出すという方針でいかなければいけないと思います。教員同士の周りの意識は、私は初任の時こんなことを言われました。英語を持っていて、その学年は5クラスありました。私とその学年5クラス全部持っていました。指導主事から計画訪問の時、「あなたは、5クラス全部持っているのね。責任重大ね。子ども達が全部、あなたの指導力ね。」そういう言い方をされました。同じ学校で学年主任がいました。中2の理科の担任で、理科の偏差値53、英語の偏差値48。「あなた、しっかりしてよね。」とはっきり言われました。これは、周りの職員間の意識ですね。自らもそういう意識を持たなければいけないし、職員間同士でもそういう意識を持っていないといけない。要するに、なあなあになってはいけません。ですから、教員の意識を変えていくことで学校は変わっていくのではないかなというふうに思います。

森田：ありがとうございました。それでは、これまで「学力向上のための地域を挙げた取り組みを」ということで、座談会の方を進めて参りました。皆さんのお話の中で、学力向上に向けてやれることはやっていこうではないか。その時に、教員の意識が大切である。私たち、安房教育研究所の所員としては、安房の教員をリードしていけたら良いというように強く心に留めました。また、パネラーやフロアの皆様から頂いた具体的な取り組みの例が動き出すエネルギーになっていくのではないかと思います。今日、ご参会の皆様に、お礼の意味を込めまして、拍手で閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。これにて、座談会を終わらせていただきます。

速水所長：今年度の5人のパネラーの方々、ありがとうございました。私ども、各組織、各校種、また保護者の方々から頂いたお言葉をしっかりと受け止めたいと思います。教育に王道なし。日々の積み重ねがすべてであるという思いをしております。先ほど役員休憩の時に、こういう言葉をしていました。「教師が、がんばるしかないのだよ。」もう一つ、「言い訳をしない。」ということ。とても大事な言葉を頂いたような気がします。十分お考えを反映できるかどうかわかりませんが、今日のお話をしっかり発信していきながら、安房の中に少しでも広げられたらという思いで今おります。本日は、ありがとうございました。